

ねたきり老人の家庭介護実態と 介護者の意識

佐藤 慶子（山形大）

目的 介護保険法実施(平成12年4月)前段階として、要介護老人をかかえる家庭のニーズの焦点、経済的負担をめぐる希望などの状況を山形をモデルに調査したものである。

方法 県下44の市町村のうちから、ねたきり老人の発生の高い地域、低い地域、中間的な地域を選んで、市町村の老人保健担当部署の紹介により、調査対象を選定。調査は、質問紙を郵送し後日調査者が面接。

結果 調査は平成12年3月まで継続中であるが、参考になると思われる例を紹介したい。

ケースA：70歳男性、介護者妻、4年前急性の脳梗塞で倒れ、左半身麻痺。週2回デイサービス、入浴・リハビリ、週1日訪問看護、週1日ホームヘルパーによる自宅入浴、と週4日のサービス利用。介護者は交通事故の後遺症があるため、(自分の共済年金あり)、1日も早く介護保険実施を要望。

ケースB：77歳女性、介護者夫、せき椎の手術と脳梗塞で、2級障害の認定を受けている。今は小康状態で男手で何とか介護、できれば介護保険の適用を受けたいが、年金生活で自己負担分に多少の不安あり。

ケースC：89歳女性、介護者長男の妻、家族は、介護者夫婦、老人、息子の4人。老人は軽い痴呆と身体全体の老化で週2日のデイサービスが楽しみ。介護者は、家の農業、家事と老人の世話で過労気味。夫は土木業手伝い、息子はサラリーマン。介護保険の施行で何とか介護を乗り切りたいと思うが息子に妻がないのが手替りのない苦しさ。